

さざなみ

国語教室

さざなみ国語教室
 第481号 2022年4月25日
 発行者代表 吉永幸司
 連絡先 大津市柳川2-11-5
 TEL 077-522-1008
 発行所 滋賀児童文化協会
 NPO 現代の教育問題研究所

対象に働きかける

大杉 稔

その研究会は二十一時に始まる。大阪のとある小学校の女性教員による自主的なオンライン研修である。

そのメンバーを束ねているのは、私の小学校教員時代に縁があったかつての実習生。今は、若手の尊敬を一身に集める中核教員に育っている。初々しさと伸び盛り、そこに奥行き深さが交錯する彼女たち五人の実践を聴くことになったと嬉しいこと。

今宵は、教職二年目の教員が実に興味深い算数の提案をした。

子どもの思考力を高める学習にしたいという願いからである。

校庭で、1年生が7人遊んでいます。そこへ1年生が12人、2年生が8人来ました。

校庭にはみんな何人いますか。(東書2上)

仮名は漢字に変換

これが元の問題である。先に1と2と8を足すと計算が楽だと気づかせ、括弧の式へと導く狙いである。それを、こう変えると言う。

校庭で、1年生が7人遊んでいます。そこへ1年生が□人2年生が8人来ました。校庭にはみんな何人いますか。

何のことはない。数字が□□に置き換わっただけ。そして問う。「□の中に入れる数字が何人だったら計算しやすいですか。」

無限に想定される数の中から、問題を解く自分にとって都合がよいものを選びせよというのだ。シミュレーションしてみよう。7に注目した子どもは、真つ先に「3」と答えるだろう。足し算

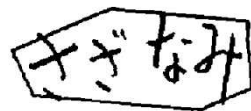
において補数の相性は最強だ。連想して13、23も挙がるかもしれない。一方、8に目を向けた子どもは「2」を選ぶだろう。初めの数「7」、後の数「8」のどちらからアプローチするのが、意味として整理することができる。つまり、「1年生の数」をまず合わせるのか、それとも「後でやってきた子ども数」を先に合わせるのかという話である。□が一つ入ることで、対話が弾み、そうした思考が活発化しそうである。それはやがて、活用力に転化するだろう。

学びとは、新しい価値観とであること。昨日までなかった、新しい「もの見方」を手に入れるということである。

教育課程の全体を人間の身体に見立てるならば、一時間の授業は、その細胞に当たろうか。その一つ一つが活性化してこそ、学びは生かせる力となる。

伝統ある本紙の読者の多くは、日々、国語科の教育実践に勤しんでおられる方々であろう。私などは、もはや実践の場を持たず、新しい提案をすることはできないが、この算数の例のように、「学ぶ対象」に能動的に働きかける環境をいかに創るかに注力していただきたい。

算数・数学なら対象は「数・図形」。国語科ならば、それは言うまでもなく「ことば」である。(大阪樟蔭女子大学)



▼脳科学者である東北大学の川島隆太教授が「夢をかなえる近道が4つある」と5年生児童(小野市)を対象に講演をされたというお話を聞いたことがあります。印象に残っているのは「前頭前野をもりもり鍛える」ということでした。▼他の3つは「学校できちんと勉強をする。」「おうちのひとと毎日話をする。」「友達と学びともに遊ぶ」ということで、小学校で大事にしていることでした。さらに、「どうやって前頭前野を鍛えるのか」については、「読み書き・計算」を少しずつ継続的に取り組むことをあげておられたそうです▼「前頭前野を健康的に育てる」ことにおいて言葉の力が大きいことは、次のことでよく分かります。それは、「おうちのひとと毎日話をする」です。一般的な言い方をすれば、コミュニケーション(聞く・話す)の大事さと理解できます。家庭はもとより学校においても「対話」ということを授業の正面に据えている意味を改めて考えてみました。対話の始まりは「あいさつ」「視線を合わせること」「よさを言葉で伝えること」です。授業で、「教師中心」「問答型授業」が課題になるのは「対話」ということから考えると納得できます▼入学・進級等の夢と希望の4月です。「前頭前野を健康に育むこと」を視野に入れた指導の視点を持ちたいものです。(吉永幸司)

漢字学習における個別最適化された学びと協働的な学び
高木 富也

91点、93点、93点、91点、89点。これは令和3年度に担任した4年生の、漢字50問テストの平均点である。もちろん50問テストをコピーした練習プリントなど無しで、完全初見での実施。年間の平均点は100点であったことから、漢字学習指導における一定の成果と手応えを感じている。他の学級の先生や保護者からも、「なぜそんなに点数が取れるのか?」「どんな指導をしているのか?」と質問されるようになった。その要因を分析したいと考える。

実践する日々が始まった。上野芳樹先生の『漢字音読名人・書き名人』(土居正博先生)、『漢字指導の常識』(学陽書房)など様々な先行実践を探った。それらの共通項は、「読み優先」であること。「漢字を一人ですべて書く学級」から、「漢字をみんなで楽しく音読する学級」に変わっていった。そして自分にとって最後の決定的なピースとなったのが、奈須正裕先生の『個別最適化された協働的な学び』(東洋館出版社)である。教育観が根底から覆されるような本書の考え方を、漢字学習指導に落とし込んだ。ある程度流れを示しやり方が浸透した頃には、子どもたちにも、「自分」にぴったりの方法で漢字を練習しなさい」と個別最適化された学級を伝えるように伝えた。漢字ドリルを音読するに、漢字ドリルに書き込む、漢字練習ノートに熟語を書く、自主勉強で例文を作る、漢字一覧プリントで網羅的に覚える、教科書巻末の既習漢字を確認する、辞書で漢字を調べ、様々な方法で学習をする。実際に様々な方法で漢字クイズを出したり、一緒に漢字クイズを出したり、子どもたちが表れていった。個別最適化を進めると、自然発生的に協働的な学びが生まれていったのである。実に力オスな空間であるが、誰一人サボる子はいない。学級全体が漢字に向かっている瞬間であった。もちろん点数として結果も出て、子どもたちは大喜び。漢字学習は学級経営にも繋がった。漢字迎える令和4年度。昨年度の実践を、新たな目の前の児童の実態に合わせながら力のつく国語教室を創っていきたい。

(東近江市立能登川南小学校)

詩の授業参観から学ぶ
森 邦博

五年の詩の授業の参観から考えたことである。

参観したのは、詩の情景を絵に表す活動場面だった。児童は選択した詩を読んで描いた絵を先生に提出している。そのときに先生は、理由や手がかりにした表現などを聞きとりながら頷いたり、短い質問をしたりして個別に対話しておられた。

私は参観していて一人の子の絵を見せてもらっていた。すると、他の子の絵が目についた。同じ詩を読んだのだが、描いている絵が違っていたからだ。

同じ詩(「道」の詩)を描いた絵だが「水平の道の絵」「縦の直線の道の絵」そして「透視図のような道の絵」とそれぞれ違って描いている。三枚を並べながら、描いた中の一人に聞いたら、「読んでいて、作者は右から左に向いて歩いていってると思ったから」との返事だった。作者と同じように歩いている気持ちで読んだのだろう。縦の道の子は、上から見た絵だと言う。さらにもう一人は、遠ざかるのを見送っているのだそうだ。

詩を読んだ読者(子ども)の心の中の情景は、そのままでは本人以外は分からない。が、絵に表すという活動があることによってそ

れが視覚化されて頭れ、友達と自分との読みの違いの比較検討が可能になったと思った。

是非この三人のような、同じ詩を選んだ友達同士で絵を比べ合ったり尋ねたり根拠を説明し合ったりするような対話の時間を作ってほしいものだと思った。

互いの絵の違いを比較して聞き合うことで、自分の読み取りとは違う読み手(友達)の読みもまた成立することに気づくだろう。それは自分の読みの視点を広げる機会を体験することでもあるだろうと思う。

また自分が根拠とした言葉の働きや、詩の情景を表すための工夫や効果を、改めて確かめたり見直したりする場合もあるだろう。そしてそのことは、学びの深まりのプロセスを実感させる場を作ることもなるだろうと思う。

しかし、授業の時間はあとわずかになっていった。それは先生が提出した一人ひとりの絵を交えて丁寧に対話を重ねておられたためでもある。が、同時に一人と先生との対話の時間が充実していたからだとも言えるように思うのだった。参観者の私の質問にも「それはうだから」と言える支えにもなっていたように思う。「個別的な支援・指導の充実」と「児童相互の学び合い育成」の両者に共通するべきは相手を互いに尊重することの育成にあることは言うまでもない。

(京都女子大学非常勤講師)

2年生 司削 裕之

今年度、2年生を担任させていたことになった。昨年からの持ち上がりだが、クラス替えをしており、子どもたちとともに新しい気持ちで臨んでいる。

- A 人にやさしい2年生になりました。1年生におしえてあげられる2年生になりたいです。(2年生)
B かっこいい2年生になりました。(1年生)
C ずうっと〇〇さん(仲の良い友だちの名前)といっしょにいたい。(1年生)

理科川柳を作ろう 蜂屋 正雄

本校では昨年、「考えることを楽しむ子ども」の姿を目指して、理科の研究授業に取り組んだ。理科学習の思考過程を楽しめる児童を目指し、①自分の考えを持つ②友だちとの話し合いで自分の考えの妥当性や友だちの考えとの共通点や差異に気づき③自分の考えを深め再構成する。という学習の姿を目指した。国語科と異なり、理科での学習教材はものであり、自然である。文章で表現することよりもむしろ理科のほうが言語活動をしやすいとも考え、学習を仕組んでいった。

- 児童に配信し、気に入った作品5つ選ぶ。
④ 投句の結果を発表する。
⑤ 作品と作者を発表する。
⑥ 感想を書く。
○ 芽が出たが、ヘチマとヒヨウタン、どっちかな
○ 理科室で、いろんなものをおぼえたい
○ 一番は、お昼すぎなの、なか
○ いろいろな、月の形は、おもしろい
○ 電流の、直流回路は、最強だ
○ 雨水は、高いところから、下に行く
○ 自分だよ、こわいけれども、ガイコツは
○ 生き物の、季節のちがいが、お、ぶかい
○ 実験で、水ちぢまない、なぜ、だろう
○ 以上の作品は、児童の中で支持を得た作品である。それぞれ、同じ思いを持った児童が多かった出来事や学習事項が表現されている。一方で、共感できるのは一部であるが、実験での思い出や驚きを表現した作品も多くあった。今回は、複数単元をまとめて句会を開くことが多く、どうしても、最後に行った実験の句が多くなった。また、川柳にも慣れてきたこともあって、普段の自主学習や作文の宿題を理科川柳にするなどして、日常化する中で理科の学習を授業や理科室でとめることなく、より、生活に近づけることもできた。考える。機会あるごとに教科に限らず川柳に取り組んでみたい。(野洲市立北野小学校)

「音読指導について」
三上 昌男

新学期、国語の授業開きは、二年生以上の学年では、教科書の扉の詩の音読から入ることを続けてきた。一人で読んだり、みんなで一斉に読んだり、役割を決めて読んだり、詩の世界を想像したり。少しづつ変化をつけて繰り返し音読し、視写も取り入れながら、暗唱まで導いてきた。暗写までできれば、なお素晴らしいと思う。

学習の導入時、教材を指導者が範読することが多い。音声は抑揚をつけず、明瞭に読み、子どもも漢字の読みや語句のまとまりを捉えやすいように配慮することが大切である。範読の後に音読練習に取り組ませると、子どもは、自分で音読して初めて読めない漢字に気が付くことがある。語彙力には個人差が大きく、個別支援も欠かせない。

「音読より上手には黙読できない」と言われる。つつかえつつかえ音読するままでは、文章全体の意味理解にはたどり着けない。音読には時間がかかるので、限られた授業時間の中で不十分なところを家庭学習で補う必要もある。以前から音読カードが工夫されてきたが、「一人一台端末」の活用が進む今日、音読を動画で撮影・記録し、授業と家庭学習をつないで子どもが主体的に取り組めるよう工夫することもできるのではないだろうか。

編集後記

▼三月例会(四八〇回)は、2月に引き続きオミクロン株感染予防という状況を考え、提案に対してメールで行った。提案は川端由起さん(草津市立志津小)提案テーマは「動物と人間が描かれた作品の心が動いた表現をポップにし、みんなに紹介しよう」(5年・大造じいさん)とガン)。